# コロナ禍の中で「テレワーク」は どのように受容されていったか

## ―「テレワーク」に関するツイートの分析による検討―

伊倉　康太

本研究の目的は，2020年２月から10月にかけての期間の日本で，「人々がコロナ禍のテレワークについてその時々に何を考え，どのように感じていたか」「それがどのように変化したか」を，予め構造化された枠組みに当てはめて捉えるのではなく，大量のテキストデータのマイニングによって探索的に明らかにすることであった。

第１章で見たように，コロナ禍のテレワークをめぐっては，さまざまなアンケート調査が実施されている。しかし，アンケート調査では，感染拡大状況や学校の休校，テレワークへの習熟といったさまざまな状況の変化の中で時々刻々と変化するコロナ禍のテレワークについて，認知や感情のリアルタイムな変化を捉えることは難しいという問題意識から，Twitterに投稿されたツイートを題材として用いる分析を採用した。

第２章では，コロナ禍のテレワークをめぐって既に公刊されている先行研究を概観するとともに，コロナ禍以前のテレワークの研究領域がどのようなものであったかを整理した。さらに，本研究の分析手法に関わる先行研究として，ソーシャルメディア分析とテキストマイニングについても，本研究に必要な範囲で概観した。

上記の背景を踏まえ，第３章では具体的には下記３点の問題を設定した。

【RQ ①】

コロナ禍において投稿されたテレワークに関するツイートのトピック（話題）は，時期によって異なるか。

【RQ ②】

コロナ禍において投稿されたテレワークに関するツイートに表れている感情は，時期によって異なるか。

【RQ ③】

コロナ禍において投稿されたテレワークに関するツイートに表れている感情を規定する要因は，時期によって異なるか。

第４章・第５章では，これらの問題について，特徴語分析・対応分析・共起ネットワークを用いて分析を行い，下記の結論を得た。

【RQ ①に対する解】

コロナ禍において投稿されたテレワークに関するツイートのトピック（話題）は，時期によって異なる。

テレワークがコロナ禍との関連で語られるようになったのは，主に２月中旬からであり，２月上旬の時点では結びつきが弱かった。２月中旬からも３月中旬まではテレワークと時差通勤が並行して語られており，分析対象データセットに含まれるツイートでテレワークそのものが話題の中心となるのは３月に入ってからである。また，４月から５月の２か月間は，2020年の中で

テレワークの実施率が最も高かったと見られる時期であるが，対応分析の結果からは，４月上旬から５月上旬までと，５月中旬・下旬では異なる特徴が見られる。「５月中旬から７月下旬まで」の時期に特徴語として現れている語は，テレワークが一旦は終息に向かう時期の特徴を表しているものと考えられる。８月以降は，特徴量も小さい傾向にはあるが，テレワークに関してメディアで報じられたニュースの影響や，「夫」「旦那」に関わるツイートが，それ以前の時期とは異なる特徴である。

【RQ ②に対する解】

コロナ禍において投稿されたテレワークに関するツイートに表れている感情の種類とその出現率は，時期によって変わることはない。しかし，RQ ③に対する解に示すように，感情をもたらす要因は時期によって異なっている。

【RQ ③に対する解】

コロナ禍において投稿されたテレワークに関するツイートに表れている感情を規定する要因は，時期によって異なる。

判定された感情の中で出現率が最も高かった「厭」の感情表現を含むツイート群に対して，共起ネットワーク分析を用いて，何が，どのような構造で「厭」の感情に影響していたのかを検討した結果,「厭」の感情表現を含むツイートを構成する語の組み合わせ(共起)パターンは, 月によって異なることが明らかになった。

本研究では，Twitter への投稿をテキストマイニングし，特徴語分析・対応分析・共起ネットワークを用いて分析することで，時期によって異なる「人々のテレワークの捉え方」を検討することができた。しかし，本研究では，テキストの内容を可視化した後は解釈的アプローチにとどまっている。定量的な手法の併用により，また異なる分析視座を得られる可能性が考えられることから，今後の課題としたい。